

島大言語文化

島根大学法文学部紀要 言語文化学科編 第五十五号 抜刷
二〇二三年（令和五年）十月

訳注 『風月小誌』 第二号（中）

要 木 純 一

訳注『風月小誌』第二号（中）

要 木 純 一

口 僑居雜詩

雲滙 三島氏 出雲松江人

書帙琴囊与酒筒。肩担手挈太匆匆。天公応是憐詩客。優貸清閑地一弓。

【訓読】書帙、琴囊と酒筒と（与）。肩は担い手は挈げ太だ匆匆。天公応に是詩客を憐れむべし。優貸す清閑地一弓。

【大意】（仮住まい雑感）帙に入れた書物、琴をいれた袋、酒をいれた筒を、肩に担ぎ手にいっぱい下げて、あわててお引越し。天が詩作に耽って放浪する私を憐れんだのか、わずかだが静かでのんびりとしたこの土地を優先して貸してくれたようだ。

【注釈】僑居―故郷を離れて仮住まいすること。韋応物・歳日京師諸季端武等に寄す「僑居帰縁を念う」。雑詩―表面きは自由、即興の詩。しばしば、思想がこめられる。文選で項目が建てられた。文選・王粲・雑詩・李善注「雑なる者は、流例に拘らず、物に遇いて即ち言う。故に雑と云う也」。三島雲滙―三島左次右衛門（一八五二―一九一〇）。後に睡雨と号す。名は粲、松江の人、詩を釈天鱗に学ぶ。松江銀行の頭取たり。松江市収入役、県会議員等歴任。明治四十三年没す。年五十九なり。剪社創立時の社員。書帙―厚紙や布で作った、書物を包むおおい。広く書物を入れる箱をいう。琴囊―琴を入れる袋。酒筒―酒を入れて携帯した器。竹製に限らない。酒杯代わりにもなる。書帙、琴囊と共に、物見、遊山などに文人が携えるもの。天公応は憐詩客―林希逸・舟に登る。風の頓に秋暑を清むるを喜ぶ。「天公応に是れ行客を憐れむべし」。優貸―寛容、寛恕。白居易・長慶二年七月、中書舍人自り出でて杭州路に守たり。藍溪の作に次す「聖人は大体を存し、優貸して死せざる（不）を容す」。清閑―静かでのんびりしていること。暇なこと。寒山・二九四「悠悠として自ら清閑（閑）たり」。地一弓―土地をはかる木製の器具、木製で形状は弓に似る。一

弓は五尺（『儀礼』郷射）。呂勝己・瑞鷗鵠其二「我に付す天然の地一弓」。

老雨云。天憐優一貸詩客一。亦不レ可レ悔。○勉齋云。優貸字下得妙。

【訓読】老雨云。天は憐んで詩客を優貸す。亦た悔ゆ可からず。○勉齋云。優貸の字は下し得て妙なり。

【大意】雨森精翁評。天が憐れんで詩作に耽る旅人を憐れむのだから、引越しを後悔してはならないということになる。○山村勉齋評。優貸の二字は、なかなかうまい措辞である。

【注釈】亦一不可悔ということにもなる。易の表現を真似たか。下得妙一現代漢語文法のいわゆる様態補語。

12過二大田一（大田を過ぐ）

樂山 熊倉氏 東京人

回レ頭天地是耶非。奔走多年未レ得レ婦。孤客胆寒小媛下。不堪風雨襲二征衣一。

【訓読】頭を回らせば天地は是れなる耶非ざるか。奔走すること多年なるも未だ婦を得ず。孤客胆は寒し小媛の下。堪えず（不）風雨の征衣を襲うに。

【大意】（大田に來た時の詩）後方（そして過去）を振り返れば天か地かわからぬ状態。長年、あちこちを奔走して故郷に帰ることができないでいる。一人ぼっちの旅人である私は、三瓶山のふもとで、不安に駆られ肝も凍えている。風や雨が、旅装に吹き付けてくるのにもうとても耐えられない。

【注釈】過一すぐ（通過する）、である。よぎる（訪問する）かもしれない。大田一現島根県大田市。三瓶山のふもとに位置する。樂山熊倉氏一不詳。回頭一これまでを回想することをかける。天地是耶非一史記・伯夷叔齊列伝「天道是邪、非邪」、頼山陽・天草洋に泊す「雲耶山耶吳耶越」の措辞を意識するだろう。景色ひいては故郷の像がぼんやりしていることと、自分の運命に対する疑問、不安の両方がこめられている。白居易・諸親友に問う「知らず親故の口、我を道いて是とする耶非とするかを」。孤客一単身で故郷を離れて旅をする人。劉禹錫・秋風引「孤客最も先に聞く」。胆寒一楊万里・黄巢磯を過ぐ「只是れ名を聞くのみにして已に胆寒し」。小媛一三瓶山。出雲国風土記・意宇郡・意宇一石見の国と出雲の国との界なる、名は佐比売（さひめ）山、是なり。この「さひめ」が早くから「三瓶」

や「小媛」と表記された。征衣―旅人の衣服。岑参・南楼衛憑を送る「応に須べからく月に乗じて去るべし、且らく為に征衣を解け」。

老雨云。悲壮感憤。是必有所為而発者。

【訓読】老雨云う。悲壮感憤。是れ必ず為にする所有つて（而）発する者ならん。

【大意】雨森精翁評。悲憤慷慨の氣に満ちている。裏に何か思うところがあつて、発露した作品に違いない。

【注釈】悲壯―悲哀を伴つた雄壮さ。後漢書・文苑伝下・祢衡「声節は悲壯、聴く者は慷慨せざる（不）無し」。杜甫・閣夜「五更鼓角声は悲壯」。感憤―憤慨。怒りを伴う興奮。戦国策・韓策二「夫れ賢者は感忿（憤） 睚眦の（之）意を以て、（而）窮僻の（之）人に親しむ」。是必有所為而発者―為は「なす」と読むべきか。解釈上は大きな違いはない。

13 盆梅 漂齋 安井氏 名泉 字士衡 出雲松江人

坐臥偏堪愛。磁盆護美人。枕辺香不斷。燈下影相親。深院把杯夕。明窓磨墨晨。笑う他の隴頭客。尽日去つて春を尋ぬるを。

【訓読】坐臥偏えに愛するに堪う。磁盆美人を護る。枕辺香は断えず（不）。燈下影相い親しむ。深院杯を把る夕。明窓墨を磨る晨。笑う他の隴頭の客。尽日去つて春を尋ぬるを。

【大意】（鉢植えの梅）坐つていても寝ていても可愛くてたまらん。陶磁器の鉢で、美人のような梅をしつかり守つてやる。枕のそばで梅の香りが絶えることなく漂い、灯火の下でその姿に親しみを感じる。奥深い庭で酒杯を上げる夕方、明るい窓の下で墨を磨つて書をものする朝、いつも可愛い梅がそばにいる。ある人が春を訪ねて丘の上を一日中歩いたがみつからず、結局家に帰つて、梅の花に春を見出したという故事があるが、馬鹿かと笑いたくなる。

【注釈】盆梅―鉢植えの梅。仇遠・盆梅など、宋代より詩題となる。安井漂齋―安井泉。一八四五―一九二四。松平氏の家令。茶人としても著名。『漂齋詩存』二卷。坐臥―日常生活でいかなる時も。偏堪愛―張祐・范宣城北楼夜宴に陪す「何れの処か偏えに恨むに堪えたる」。堪愛（○●）は可愛（●●）に同じ。枕辺―枕上に相当する和漢語。平仄を合わせるために用いた。和語のまくらべによる。『古事記』上（延佳本訓）「御枕方（みまくらべ）に匍匐ひ」。燈下

影相親―韓愈・符城南に読書す「灯火稍や親しむ可く、簡編卷舒す可し」。読書の秋を強調する原典を、初春の夜に梅をめぐる描写に転用。李密・陳情表「形影相い弔う」の孤独感を、一人楽しむ気分転用。この影は、直接には梅の影であろうが、自らの影にもとれるように表現した。深院―表から奥まったところにある建物に囲まれた庭。李白・江油尉の序に贈る「嵐光深院の裏」。把杯夕―司空図・故郷の杏花「左に花枝を把り右に杯を把る」。明窓―光のよく差し込む窓。快適な書齋の描写。謝混・二王を送って領軍府に在って集う「明窓朝暉を通ず」。隴頭客―甘肅省の隴頭と考へてもよいし、小高い丘と考へてもよいであろう。家から離れてそこを踏破する人。次項を見よ。尽日去尋春―伝戴益・春を探る「尽日春を尋ぬるも春を見ず。芒屨踏んで遍し隴頭の雲。帰り来りて試みに梅梢を把つて看れば。春は枝頭に在って已に十分たり」。

老雨云。前聯伝神。咏物宜如此。

【訓読】老雨云う。前聯は伝神。咏物は宜しく此くの如くすべし。

【大意】雨森精翁評。第三、四句は、梅の精神性までとらえた迫真の描写。詠物詩はこのようであるべきだ。

【注釈】前聯―律詩の第三句、四句の対。領聯。伝神―世説新語・巧芸「伝神写照は、正に阿堵の中に在り」。咏物―詠物詩。漢詩の一体。鳥獸草木や自然そのものを主題として詠ずる詩。

14 観梅 楓庵 山下氏 長門阿武郡人

蕭寺門前野竹傍。瘦梅臨水白於霜。山僧偶汲黄昏月。併掬横斜影裏看。

【訓読】蕭寺の門前野竹の傍ら。瘦梅水に臨んで霜於り白し。山僧偶ま汲む黄昏の月。併びに掬んで横斜影裏に看る。

【大意】（梅見）寺の大門の前、野生の竹の生えているそば、やせた梅が川にかかっている、霜よりも白い花を咲かせている。たまたま、お坊さんがやってきて黄昏の月が映った水をくんだ。するとさらに梅の姿も一緒に桶に入りこんだ。その様を、梅の斜めに伸びた枝の下でお坊さんはいげしげと見入っている（その姿もまた桶の水に映っている）。

【注釈】山下楓庵―不詳。山陰新聞の漢詩欄にしばしば登場。長門阿武郡―現山口県山口市及び萩市。蕭寺―寺の雅

称。蕭蕭たる寺の意ではない。李肇・唐国史補卷中「梁武帝の寺を造るや、蕭子雲をして飛白もて蕭字を大写せ令む」。この故事により寺は蕭寺と呼ばれるようになった。山僧偶汲黄昏月―下句とともに林逋・山園小梅「疎影横斜す水清浅、暗香浮动す月黄昏」を意識する。併掬横斜影裏看―楊万里・張功父梅詩に和す十絶句其八「横斜影里花の残わるを惜しむ」。

老雨云。清氣冷然。

【訓読】老雨云う。清氣冷然たり。

【大意】清らかな気が冷ややかである。

【注釈】清氣冷然―梅の清らさ、白さに連想される初春の寒さ等を意識した評であろうか。

15贈二桃園醉士（桃園醉士に贈る）

秋水釣士 松田氏 出雲松江人

藜々其葉自成レ繁。幾樹花深可レ避レ喧。中有二醉仙能養レ氣。將レ言方寸是桃源。

【訓読】藜々（しんしん）たり其の葉（は）自（おの）成（か）ら繁（しげ）なり。幾樹（いくじゆ）の花深（はなふか）うして喧（かまひ）びすしきを避（よ）く可（べ）し。中（うち）に醉仙（すいせん）の能（よ）く氣（き）を養（やしな）う有（あ）つて。將（まさ）に言（い）わんとす方寸（ほうすん）是れ桃源（とうげん）なりと。

【大意】（桃園醉士に献呈した詩）こんもりとした葉が茂みをつくり、幾本かの桃の花は、屋敷の奥深くに咲いていて、世の騒音から遠ざかることができる。その中でよっぱらいの仙人であるあなたは英気を養っている。そして言おうとしている。わが心こそが実は桃花源なのだ。

【注釈】桃園醉士―誰を指すか不明。松田秋水―名は信道。字は徳卿。一八一九―一九〇二。漢詩人。漢字を和田義八郎、絵画を松原文忠にまなび、出雲松江藩につかえた。藜々其葉―詩経・桃夭「其の葉藜々たり」。幾樹花深可避喧―俗世の騒がしさを避ける。杜甫・阮隱居に貽る「喧を避け猛虎に甘んず」。中有―白居易・長恨歌「中に一人有り字は太真」。醉仙―酒仙に同じ。徐積に「醉仙」詩あり。養氣―道教的色彩で使われることが多い語だが、ここでは、人間が本来もつ正しい気を養うこと。孟子・公孫丑上「我善く吾が浩然の（之）気を養う」。將言―拾得「將に言わん

とす長しなえに死なずと」。方寸—心。心は胸中方一寸の間にあるとするとところから。列子・仲尼「嘻。吾れ子の（之）

心を見たり矣。方寸の（之）地虚たり矣」。桃源—陶淵明の「桃花源記」から。俗世間を離れた安楽な世界。仙境。

愛山云。高雅曠逸。桃園醉士之境涯可想。○編者云。三四妙甚矣。

【訓読】愛山云う。高雅曠逸。桃園醉士の（之）境涯想う可し。○編者云う。三四妙たる甚し矣。

【大意】高橋愛山評。気品が高く自由な態度。桃園醉士とかいう人の生きざまがしのばれる。編者（おそらく平賀静遠）評。第三句、第四句がことに素晴らしい。

【注釈】高雅—超俗的で、優雅であるさま。また、卑俗を憎む気風。三国志・魏志・崔林伝「高雅の（之）弘量を体す」。曠逸—超然的な風格。胡応麟・詩藪・古体中「古詩には）高閑、曠逸、清遠、玄妙を以て宗と為す者有り」。三四妙甚矣—庭から、その主人の人となりに焦点が移る点が妙なのであろう。

16 早起涉園（早起して園を渉る）
青蛙居士 黒田氏 出雲三分一人

茅檐月落紙窓虚。竹樹陰濃清有餘。独涉二庭園一人未起。盆池添水護二金魚。

【訓読】茅檐月は落ち紙窓虚なり。竹樹陰濃くして清きこと餘り有り。独り庭園を渉るも人未だ起きず。盆池水を添えて金魚を護る。

【大意】（早起きをして庭を散策する）そまつなカヤののきに月が隠れて行き、障子には何の影も映っておらぬ。竹林の影は色濃く、その清らかさは十分すぎるほどだ。一人ぼっちで庭を歩いていく、誰もまだ起きてこない。鉢に水を加えて金魚をいつくしむ。

【注釈】早起涉園—陶淵明・歸去來兮辭「園は日に涉りて以て趣を成す」に基づく。ふらふらと遊覧すること。黒田青蛙—未詳。三分—現出雲市斐川町三分市町。江戸時代宍道湖西部を干拓してできた村。明治二十二年、他村と合併して出東村となり、後斐川村（町）に属して、現在出雲市に合併。茅檐—カヤ等の草で覆った軒。後、粗末な家全般を指す。陶淵明・飲酒二十首并序其九「檻樓茅檐の下」。月落—何吾騶・歳杪懐いを友人に寄す「月紙窓に落つれば被

を共にするを懐う」。紙窓―紙を張つた窓。白居易・晁寢「神窓明らかにして暁たるを覚ゆ」。虚―遮るものがなく透明なこと。文徵明・余陳氏に至る毎に・・「短檐横さまに啓いて紙窗虚なり」。竹樹陰濃―羅欽順・節庵叔父七十を寿す「竹樹陰濃小径迂なり」。清有餘―姚鶴・許璋少府に寄贈す「文才清きこと餘り有り」。独涉庭園人未起―雍陶・友人の幽居を訪ぬ二首其一「深院客来りて人未だ起きず」。盆池―もとは、大きなはち（日本の盆とは違ふ）を埋めて作つた池。広く、庭の小さな池を指す。韓愈に盆池の詩有り。ただし、ここは日本の風習から言つて、地上に置いた大きな金魚鉢のことであろう。護金魚―護字は奇異だが、世話をしてやるのが、危険から守つてやることになるであろう。見守るといふ気持ちか。

老雨云。詩亦清有餘。

【訓読】老雨云う。詩も亦た清くして餘り有り。

【大意】雨森精翁評。この詩自体も、その清らかさは十分すぎるほどだ

【注釈】詩亦清有餘―詩の内容だけでなく、詩そのものが。雨森精翁はこのパターンの評が多い。

17 秋日訪二山寺（秋日山寺を訪ぬ）

勝部重基 出雲坂田人

丹楓烏柏夕陽山。秋色森沈鳥語閑。石逕曳二筇尋二古寺。塔尖聳二在二白雲間一。

【訓読】丹楓烏柏夕陽の山。秋色森沈として鳥語閑たり。石逕筇を曳き古寺を尋ぬ。塔尖聳えて白雲の間に在り。

【大意】（秋のある日山寺を訪れた）赤いカエデとハゼに夕日の照る山。秋の景色は、しつとりと沈んでいて、のんびりとした鳥の鳴き声が聞こえる。石段を杖付きながらのぼり、目的地の古寺を探していると、塔の尖端が白い雲の間にそびえているのが見えた。

【注釈】勝部重基―不詳。出雲坂田―出雲市斐川町坂田。前首作者出身の三分一（市）のすぐ北。丹楓―杜甫・秋峽「門巷丹楓落つ」。なお、中国の楓は日本のカエデと別種。葉の形は似るが、数倍も大きい。ここは、日本のカエデ。烏柏―烏白とも。楽府・西洲曲「風吹烏白樹」。正確には中国産ナンキンハゼだが、和種のハゼノキと考えてよい。楓

と同じく、紅葉する落葉樹。夕陽山―夕日に照り映える山を圧縮した表現。賈島・馱法師を送る「高雪夕陽山」。森沈―疊韻語。林がこんもりと茂っているさま。また、そのような林の暗くて陰鬱なさま。阮籍・詠懷其五十一「松柏鬱として森沈」。石逕―石徑。石を積んで作られた山道。杜牧・山行「遠く寒山を上って石徑斜めなり」。白雲間―王之涣・涼州詞二首其一「黄河遠く上る白雲の間」。詩語としての白雲には、山中の隠者の気分が漂う。陶弘景・山中何の有る所ぞと詔問せらる。詩を賦して以て答う「嶺上白雲多し」。

老雨云。淡而雅。

【訓読】老雨云。淡にして（而）雅なり。

【大意】雨森精翁評。無欲恬淡な隠者の気風もある一方、知識人の優雅さも備えている。

【注釈】淡而雅―隋書・牛弘伝「淡雅の（之）風有り」。景色についてもいうのであろう。

18 庚辰一日 岩門居士 岡田氏 出雲広瀬人

東窓迎^レ白坐^二正晨^一。殊覚瓶梅含^レ笑新。節物亦随^二人意^一改。纔過一夜即回^レ春。

【訓読】東窓白を迎えて正晨に坐す。殊に覚ゆ瓶梅の笑を含んで新たに節物も亦た人意に随いて改まる。纔か一夜を過すや即ち春に回る。

【大意】（明治十三年の元旦）東側の窓に日が照って白んできたなか、正月の朝を坐って迎える。今日はことに花瓶に生けた梅が微笑んでいるようで、それが新鮮に感じる。季節の事物も人の気持ちに随って変わっていくのであろうか。大晦日の一夜を越すや否や春が帰って来た。梅の花にも私にも。

【注釈】庚辰―明治十三年（一八八〇）。この号の出版された年。一日―元日のつもりであろう。岡田岩門―未詳。

出雲広瀬人―広瀬は現安来市。出雲藩の支藩。山村勉斎につながる藩校関係者か。迎白―朝日を迎えることであろう。張協・雜詩十首其四「朝霞白日を迎う」。坐正晨―正晨は、用例は少なく、平仄上も問題があるが、正月の朝の意であろう。劉澄甫・人日逢春「暮景晴旦に逢い、幽居正晨を喜ぶ」。含笑―あからさまに表情に出ない笑い。ふくみ

わらいではない。劉琨・胡姬年十五「笑いを含み酒爐の前」。節物―季節の風物。梅のみならず、初春全般の雰囲気を用いである。人意―人の気持ち。情緒。陳汝錫・劉漕に寿す二首其一「節物も也た人意に随つて好し」。回春―曆の上で新春を迎えるだけでなく、春の気分になること。冬去春来。蘇軾・浪淘沙探春「檻内の羣芳芽未だ吐かざるに、早くも已に回春」。

勉齋云。殊覚二字。根^レ坐^二正晨。而已^レ胚^二胎^三第三意味。【已はもと已に作る。今改む】

【訓読】勉齋云う。殊覚の二字。正晨に坐すに根ざし。而して已に第三の意味を胚胎す。

【大意】「殊覚（ことにおぼゆ）」の二字は上の句の「正晨に坐す」にもとづいているのだが、さらに第三の意味がすでに萌しているわけだ。

【注釈】勉齋云。殊覚二字。根―不審。根拠とするの意にとつた。正月の改まった気分の中で、神経を研ぎ澄ませて正座していたからこそ、梅の変化に特に気が付いたということか。胚胎第三意味―これも何が第三の意味なのか不審。覚醒する（目が冴える）、梅の姿に気が付く、一種の悟り（人意の回春）という三段階の「覚」があるということか。

19 観^レ菊有^レ感（菊を観て感有り） 篤軒居士 岩崎氏 全所人

人也古今変。花乎今古侔。星霜千百歳。尚見^二晋時秋^一。

【訓読】人也古今に變ず。花乎今古に侔し。星霜千百歳。尚お見る晋時の秋。

【大意】（菊見でふと思つたこと）人は昔と今は変わつてしまふが、花よおまえは今も昔も同じだなあ。千百年たつても、陶淵明が見た東晋の秋の菊を今なお眼前に見ることができぬ。

【注釈】有感―ふと感じたことを詠む体裁を装いながら、裏に主張、感慨のある詩題の付け方。維新後の世の変転が意識にある。岩崎篤軒―岩崎澹（しずか）か。元広瀬藩儒 星霜―星は一年に天を一周し、霜は毎年降るところから一年。引いて長い年月をあらわす。晋時秋―陶淵明・飲酒其五「菊を採る東籬の下」。菊の花は当然秋である。勉齋云。多少感慨。然。人亦有^二今古之侔者^一。兄其可知^レ之。

【訓読】勉齋云う。多少の感慨ぞ。然れども。人も亦た今古の（之）侔しき者有り。兄其れ之を知るべし。

【大意】山村勉齋。この詩には、どれほどの感慨が込められていることか。そうはいっても今も昔も同じ、相通ずるものを持つ人がいる。あなたはきつとそれがわかるでしょう。

【注釈】多少―疑問、感嘆。どれほどの。多くの数量に対して言う場合が多い。人亦有今古之侔者―維新後も節操を守った人をいうのか。人類普遍に古代から変わらぬ道徳が存在することをいうのか。兄―年上の人に親愛の意を込めて言う。岩崎澹ならば、勉齋の十数歳年長。

20 泛舟 半醒 佐川氏 出雲松江人

桃霞桜雪映晴鮮。気暖湖山春靄然。垂柳之湾芳草渚。有水魚。処便停レ船。

【訓読】桃霞桜雪晴に映じて鮮かなり。気暖かくして湖山春は靄然たり。垂柳之湾芳草の渚。水魚有る処便ち船を停む。

【大意】(六道湖に船を浮かべて) 桃にかかった霞、桜の花吹雪、晴天の中、照り映えて鮮やかである。気候もぬるくなつて、湖とその周りを囲む山々に春の気配がほんやりと漂う。しだれ柳の植わった入江、薫り高い草の生えている渚、白魚がいそぐなところを見つけるや否や、舟を泊めた。

【注釈】佐川半醒―佐川環。佐川玄玄。松江の人、釈天鱗に従学す。のち東京に移る。剪淞吟社社員。著書に『仏教要義』。子は、英学者、俳人の佐川春水。春水の子は、島根大学教授（英米文学）佐川洋。桃霞―楊万里・戯れに司花謠を作る「坐客は桃霞李雪の中」。桜雪―中国に用例はない。日本特有の表現。映晴鮮―映は映に同じ。陶翰・房侍御に贈る「雲霞映晴川」。中国で晴を名詞として用いることはまれ。日本語的な言い方か。鮮は鮮明、色彩鮮やか。李白・古風「朝日艶にして且つ鮮」。気暖―春爛漫の気分。杜甫・昼夢「桃花気暖かにして眼は自ら酔う」。湖山―おそらく六道湖と周辺の山々。春靄然―靄は靄に同じ。穏やかで親しみを感じること。和氣藹々。施彦執「北窓炙輶」巻上「伯淳既に見ゆるに、和氣藹然として眉宇の間に見る」。ここはもやがかかっていることも兼ねているのであろう。渚―中国では中洲を指すことが多いが、ここは波打ち際。有水魚処―二字+二字にならぬ破格をわざと用いた。水魚は、

中国では氷の下の魚を指すが、ここは和語のひお、ひうお（鮎等の稚魚）を漢字にした和漢語。安道湖のいわゆるしらうおに援用。便―すぐに。そのまま。停船―崔顥・長干曲四首其一「船を停めて暫く借問す、或いはおそらく是れ同郷ならんかと」。

編者云。一気呵成。

【訓読】編者云う。一気呵成。

【大意】編者（平賀静遠か）評。一氣に作り上げた作品だ（氣迫がこもり、首尾一貫している）。

【注釈】一気呵成―ひといきに文章を書き上げること。誉め言葉だが、和臭や同意の繰り返しが多い粗もめだつことを揶揄する気分もあるか。胡応麟・詩薮「風急天高の若きは・・・一気呵成なり」。

21 秋雨 蓼坪 中村氏 駿河静岡人

月黒陰雲覆半空。蕭然踈雨入簾櫳。知他三径就荒处。秋蝶夢寒殘菊中。【三号附正誤に「経ハ径ノ誤」という。今此に依つて改む】

【訓読】月黒くして陰雲半空を覆い。蕭然たる踈雨簾櫳に入る。知る他の三径荒に就く处。秋蝶夢寒し殘菊の中。

【大意】（秋雨）月がなくて真つ暗な夜、暗い雲が空の半ばを覆っている。ぼつりぼつりと寂しげな雨がすだれから入ってくる。きつと、わが隠者風味の庭の三つの小道が荒れ果てたあたりに、秋の蝶が散りかけた菊の中で凍えながら夢をみているのだろうか。

【注釈】中村蓼坪―静岡の人、明治十六年、松江裁判所判事たり。月黒―雨などで月光の殆どないことをいう。王昌齡・筓篔引「其の時月黒くして猿は啾啾」。陰雲覆半空―李商隱・西南行、却つて相い送る者に寄す「百里の陰雲雪泥を覆う」。覆は、上からおおう場合（覆蓋）に用いるので、ここにはふさわしくない。半空も空中という意味。それをおおうという和語を漢字に変えた表現。蕭然―ひっそりとして寂しい気持ちにさせる雰囲気。陶淵明・五柳先生伝「環堵蕭然」。踈雨―まばらに降る雨。岑参・西掖省即事「北山疏雨朝衣に点ず」。入簾櫳―謝惠連・七月七日夜牛女

を詠む「昇月簾櫳を照らす」。簾はカーテン、櫳は窓枠だが、簾の方に焦点がある。知他―多くは、知らんやと訓じて、疑問の意にとる。和語の「かしら（ん）」に当たると。ただここは、知る（知っている）と肯定で読んでもよからう。他は漠然と状況を指す。三径就荒―陶淵明・帰去来兮辞「三径荒に就き、松菊猶お存す」。三径は、漢の蔣詡が庭に三本の小道を作り、松・菊・竹をそれぞれに植えたという故事による。隠者好みの庭をいう。秋蝶―和漢ともに春の蝶が多く詠まれて、秋の蝶が詠まれた場合はうらぶれた哀れを催すものとして描かれる。白居易に秋蝶の詩あり。

老雨云。寒字妙。

【訓読】老雨云う。寒字妙なり。

【大意】雨森精翁評。寒といっているところが見事だ。

【注釈】寒字妙―結句は、『莊子』の胡蝶の夢を典故とするが、この夢は、原典と違って、寒さを感じさせるような、つらい、わびしいもの。おそろくは作者自身の心象風景。

22 西京

河原進 出雲楯縫郡人

九陌縦横張 軟紅。参差楼閣夕陽中。村童何幸初来レ此。拜得千年古国風。

【訓読】九陌縦横し軟紅張り。参差たる楼閣夕陽の中。村童何の幸いありてか初めて此に來たる。拜み得たり千年古国の風。

【大意】（京の都）たぐさんの大通りが縦横に走る中、やわらかな赤い花が満ち満ちているようなにぎやかさ。夕陽の中、二階建ての家のでこぼこのシルエツトが広がる。田舎のガキである私は、どういふ幸せに恵まれたのか、生まれて初めてここにきて、千年も続く古都の風景を仰ぐことができるなんて。

【注釈】西京―東京に対して、京都をいう。この時期、東京はまだとうけいと漢音で読んでいたと思われるので、それにあわせてせいけいと読んだ。河原進―未詳。楯縫郡―現出雲市平田町を中心とした郡名。風土記の時代にまでさかのぼる。明治二十九年、簸川郡成立により廃止。九陌―都の何本もある大通り。京都の東西を貫く通りは、九条まで

ある。駱賓王・帝京篇「三条九陌麗城の隈」。縦横漲軟紅―都会の繁華なさま。やわらかな赤い花が塵となつて舞うようなあでやかな雑踏。蘇軾・蔣穎叔、錢穆父の景靈宮に從駕す、に次韻す「軟紅猶お恋う車塵に属なるを」。その自注「前輩戲語に、西湖の風月、東華の軟紅香土に如かず（不）と有り」。参差楼閣―参差は、ぎざぎざ、長短ばらばらなさまを表す双声の語。陸游・横塘「参差たる楼閣高城の上」。夕陽中―白居易・偶ま飲む「妓亭檐下夕陽の中」。村童―田舎の子。王維・鄭州に宿す「村童雨中に牧す」。何幸―劉希夷・高岳に笙を聞く「何の幸いありてか幽音を承く」。幸運に恵まれていることに感謝する気持ち。拝得―得を付けて拝を二文字にのばしたが、可能の意もあり。蘇洵・拝年の人其一「拜し得たり老人の山上に去るを」。古国風―古い伝統を持つ土地のお国ぶり。貫休・王慥常侍卒するを聞く三首其三「重ねて興す古国の風」。

老雨云。眞是西京詩。

【訓読】老雨云う。眞に是れ西京の詩。

【大意】雨森精翁評。これはほんとに京都の実景をうたつた詩だ。

【注釈】眞是西京詩―雨森精翁は、幕末、他藩との外交のため、しばしば京都を訪れた。私も京都に滞在したから、この詩の感動がよくわかるという気持ち。

23咏菊（菊を咏む）

逐浪 富永氏 伊豫宇和嶋人

濃紅澹白一枝々。培養功成漸及レ時。屈指重陽無幾日。為編圃畔小笹籬。

【訓読】濃紅澹白一枝々。培養の功成り漸く時に及ぶ。指を屈すれば重陽幾日も無し。為に編む圃畔の小笹籬。

【大意】（菊の詩）濃い赤の菊、ほのかな白の菊が一枝一枝に咲いている。長い間育てた結果が出て、だんだんと咲くべき時になっていく。指を折れば、重陽の節句までもう幾日もないので、畑のそばに小さな垣根を作つてやった。

【注釈】富永逐浪―名は空庵。伊豫の人。明治十六年、白濁小学校長たり。伊豫宇和嶋―愛媛県宇和島市。幕末は伊達宇和島藩。及時―時節を逃さず間に合うこと。陶淵明・雜詩「時に及んで当に勉勵すべし」。屈指―指折り日にちを

数えること。短い期間（まもなく）の場合が多い。重陽―旧曆九月九日。菊酒を飲み長寿を祈る習慣があった。日本では特に菊の節句という。無幾日―王維・魏郡李太守の赴任するを送る「君行くこと幾日も無くして、当に復た山陂を隔つべし」。芭籬―芦や木の枝で作った垣根。王建・長安皇後庭に花を見る「新たに石笋を排べて芭籬を遶らす」。

老雨云。愛菊之情。溢言表一。○編者云。好詩不_二必点_一。

【訓読】老雨云。菊を愛するの（之）情。言表に溢る。○編者云。好詩必ずしも点せず（不）。

【大意】雨森老雨評。菊を愛する気持ちが、言外にあふれている。編集者評。素晴らしい詩で、批点を加える必要がない。

【注釈】溢言表―表は外。言葉でははつきり言わないが、作者の気持ちがよくわかる。好詩不_二必点_一―全句がよいので、どこか一部に批点を付ける必要がない。実際、原本のこの詩の右には他の作品と違つて、○や・が付けられていない。

24夜泊 蕉雨閑人 坂田氏 出雲松江人

江頭月冷夜漫漫。霜氣侵_レ衣眠未_レ安。忽訝_レ篷窓白_レ於_レ雪。扁舟流在_二葦花灘_一。

【訓読】江頭月冷やかなり夜漫漫。霜氣衣を侵して眠り未だ安からず。忽ち訝る篷窓雪於りも白きを。扁舟流れて葦花の灘に在り。

【大意】（夜船で一泊）川辺に月は寒々と照り夜の闇はどこまでも広がって行く。霜を含んだ空気が服にしるび込んで十分に眠れない。おや何だろう。急に、とま舟の窓が雪よりも白くなった。小舟があしの花咲く浅瀬に流れ込んだのだ。

【注釈】夜泊―宍道湖、斐伊川、大橋川の水系であろうか。坂田蕉雨―不詳。江頭―頭はものの端。川岸。宍道湖も江と見なしうる。夜漫漫―夜の暗闇が、時間的にも、空間的にも、とりとめなく広がっている様子（あたかも湖水のごとく）。飯牛歌・長夜漫漫何の時にか旦けん。霜氣侵衣―清の人許儒龍・白鬢江病を抱いて夜坐す「霜氣衣を侵して夢成らず（不）」。偶然の類似か。眠未安―未は過去の否定ではなく、ある状態に達していないことをいう。忽訝―訝は驚いてなぜそうなったか不思議に思う。韓偓・及第過堂の日の作「忽ち訝る麻衣相庭に謁するを」。篷窓―とまぶき

の小舟の窓。扁舟—小舟。史記・貨殖列伝「〔范蠡〕乃ち扁舟に乗つて江湖に遊ぶ」。葦花灘—灘は、流れのはやい浅瀬を普通は言うが、岸近くの中州を指すこともある。ここは後者であろう。宍道湖は明治まで、芦に一面おおわれていたという。葦花は、正確には、花ではなく、実を結んで白い綿毛を生じた状態。

老雨云。夜泊往々有「此景況」。非「実践者」恐不「知」。○編者云。画手不「及」。

【訓読】老雨云う。夜泊往々にして此の景況有り。実践する者に非ざれば恐らくは知らざ（不）らん。○編者云う。画手も及ばず（不）。

【大意】雨森精翁評。船中で夜泊したときしばしばある光景。実際に経験したものでないとわからないだろうなあ。編者評。絵描きでも描けない光景をよく描写している。

【注釈】夜泊往々有此景況—光景、状況に同じ。非実践—宋史・理宗紀二「我が朝の周敦頤・張載・程顥・程頤に至りて、真見実践、深く聖域を探る」。画手—絵描きの名手。結局、一幅の絵を見るような迫真の描写をたたえる。杜甫・冬日洛城北玄元皇帝廟に謁す「画手前輩を看る」。

25夏日田園 樵雲山人 鶴飼氏 仝所人「三号附正誤に「春ハ夏ノ誤」という。今此に依つて改む」

万頃連雲麦浪黄。野人此際事「蚕桑」。揭「簾」静坐薰風裏。燕子花边燕子忙。

【訓読】万頃の連雲麦浪黄なり。野人此の際に蚕桑を事とす。簾を掲げて静坐す薰風の裏。燕子花边に燕子忙し。

【大意】（夏の日の田圃で）広く広く連なる雲、地上では麦畑が風になびいて黄色の波を広げる。百姓である私はこんないい時候にも閉じこもつて養蚕に精を出している。作業の手を休め、すだれをあげて、薫風が吹く中、静かに坐つて外を眺めると、かきつばたのそばでツバメがせわしく飛び交っていた。

【注釈】夏日—訂正後のように、季節は夏。鶴飼樵雲—不詳。万頃—頃は百畝。連雲—雲が相連なる（広さの形容）。麦浪—麦が一面に波打つ様。欧陽脩・太清宮に遊ぶ。城を出づる馬上の口占「野闊く風麦浪を揺らして寒し」。

野人—本来は町に住まぬ郊外の無官の人をいうが、広く農民を指す。此際—此時に同じ。平仄の関係で用いた。口語

的。事蚕桑―陌上桑「羅敷蚕桑に善し」。養蚕は、蚕に桑の葉をあてがう初夏に室内で徹夜の作業が続く。薫風―初夏の穏やかで温かい南風。呂氏春秋・有始「東南を薫風と曰う」。燕子花辺―カキツバタ。中国では詩語としては一般的ではないようである。花がツバメに似ている。燕子忙―燕子の子は助辞。燕子花と語呂合わせて軽快なリズムを作るとともに、雨森精翁の評するように、静忙を対比している。

老雨云。静忙映帶太好。○勉齋云。平而峻。淡而濃。

【訓読】老雨云う。静忙の映帶太だ好し。○勉齋云う。平にして（而）峻。淡にして（而）濃。

【大意】雨森精翁評。静かさど忙しさの対比が優れている。○勉齋評。平穩であるかのように、激しさがあり、あつさりしているようで細やかである。

【注釈】静忙―麦浪⇓蚕桑⇓静座。燕子花⇓燕子忙。映帶―映は映に同じ。色が映えあうこと。詩文の前後が対応することも言う。王羲之・蘭亭州序「又清流激湍有つて、左右に映帶す」。ここは自然描写とレトリックの両方をいうであらう。平而峻―特に前半。蚕桑は、蚕の桑を食べる音が激しい。淡而濃―特に後半。静座は気持ち仕事から離れて淡泊。燕子花の色は濃厚。

26 煎茶 せんちゃ 信齋 しんさい 大野氏 おののし 仝所人 どうじよのひと

閑汲二前溪水。芳茶煮二石瓶。香煙三四縷。和月遶二窓櫺。

【訓読】閑かに前溪の水を汲み。芳茶石瓶に煮る。香煙三四の縷。月に和して窓櫺を遶る。

【大意】（茶を煮る）のんびりと家の前の谷水を汲み、薫り高いお茶を石の土瓶で煮る。かぐわしい茶の香りがするかな湯気が三四本立って、月の光と混じりながら格子窓を巡っている。

【注釈】煎茶―茶葉を煮て飲む茶を作ること。現代日本の緑茶の一種や製法を指す用法とは違う。封演・封氏聞見記・飲茶「城市多く店舗を開き、茶を煎て之を売る」。大野信齋―不明。閑汲―兪桂・夏昼「閑かに清泉を汲んで自ら茶を煮る」。煮石瓶―曹松・鶴鳴泉に題す「満として石瓶に汲んで回る」。香煙―香をたいた煙が普通の意味だが、ここ

は茶の香りがする湯気のことであろう。和月―月光と調和して。月光とくんずほぐれつの様か。黄庭堅・寄せて叔父夷仲に上まつる三首其一「夢魂は月に和して秦隴を遶る」。窓櫺―窓の格子。裴翎・伝奇・崔煒「窓櫺を断つて躍り出づ」。

老雨云。清淡。

【訓読】老雨云う。清淡。

【大意】雨森精翁評。清らかで淡泊な味わい。

【注釈】清淡―清くさっぱりしていること。世俗の欲望が少ないこと。世説新語・言語注所引王中郎伝「祖は東海太守丞、清淡平遠」。

27探レ春 得雪字（春を探る、雪の字を得たり）

槻陰処士 若槻氏 名敬 字緝熙 全所人

短杖越二晴色。春泥路凹凸。柳梢未レ著レ金。梅萼些含レ雪。流水上二鷗身。微風鼓二鶯舌。煙光争入レ詩。不三復問二工拙一。

【訓読】短杖晴色を越い。春泥路は凹凸。柳梢未だ金を著けず。梅萼些か雪を含む。流水鷗身に上り。微風鶯舌を鼓す。煙光争いて詩に入る。復た工拙を問わず（不）。

【大意】（春の景色遊覧。詩会のくじで雪の字を引いた）短杖を突いて晴れ渡った景色を訪ね行く。春の雪解けの泥道はでこぼこ。柳の梢はまだ金色のつぼみを付けない。梅のつぼみは少しばかりの花びらが見えかけている。流れる川の水が鷗の体をのぼつていく。そよ風がその舌を共鳴させているように、鶯の声。霞んだ素晴らしいあれこれの景色がわが詩作に入り込んでいる。うまい下手など関係なく、私は詩作を楽しもう。

【注釈】探春得雪字―詩宴で探春の題が出て、何かの句から選んだ字で作ったくじを引くと雪字が出たので、雪字を韻として用い、雪の属する屑韻（平水韻）で作詩することになった。若槻槻陰―若槻守拙。名は敬。松江の人。雨森精翁・沢野舍斎に従学し、島根・乃木・仁多の郡長を歴任す。明治三十五年没す。年五十三なり。総理大臣若槻札次郎の

母方の叔父で養父。詩集『槻陰遺稿』。名敬字緝熙―詩・大雅・文王「穆穆たる文王、於（ああ）緝熙して敬しむ止」による。短杖―軽い散策のためだろう。趣―趁の俗字。春泥路凹凸―凸にテツの音あり（意味は違う）。屑韻として用いる。柳梢―白居易・四年春「柳梢黄嫩として草芽新たなり」。梅萼―梅のつぼみ。歐陽脩・玉楼春・上林の後亭に題す「柳眼未だ開かず梅萼小なり」。些―いささかの意は俗語的で、詩語としてはあまり見られない。含雪―崔道融・梅花「数萼初めて雪を含む」。雪は、雪そのものではなく花の色の象徴。含はつぼみの内部で花びらが成長していること。鼓鶯舌―鼓は鼓に同じ。鼓は鼓に同じ。動詞として用いたか。逸周書・芮良夫「小人は鼓舌す」。おべんちゃらなどの意で、よい意味ではあまり用いない。煙光―霞のかかったボヤつとした光景。主に美しい春景をいう。争入詩―皎然・岷山にて崔子向の宣州に之きて裴使君に謁するを送る「楚思詩に入りて清し」。

勉齋云。用字平々。不似三分字者。

【訓読】勉齋云。用字平々。字を分かつ者に似ず（不）。

【大意】山村勉齋評。穩当至極な言葉遣いで無理がない。分韻のくじで作らされた詩とはとても思えぬ。

【注釈】平々―習熟して秩序があること。書経・洪範「偏無く党無し、王道平平」。

28月下独坐 清修閑人 柘植氏 名正富字士潤 仝所人

露濯清輝 月色明。敲詩独坐 養幽情。芭蕉時向 西風舞。忽弘紗窓 影有聲。

【訓読】露は清輝を濯ぎ月色明らかなり。詩を敲いて独り坐し幽情を養う。芭蕉時に西風に向かつて舞い。忽ち紗窓を払って影に声有り。

【大意】（月の光のさす中で、ひとりすわりながら）きよらかな光が露に洗われて、月がいつそう明るく輝く。詩をあれこれひねりながら、一人部屋にたたずんで静かな気持ちに浸る。芭蕉の葉が時々西風にあたって舞い踊り、絹のカーテンがかかった窓をさつと払う。あたかもその影から声が出てくるかのようだ。

【注釈】月下独坐―李白の月下独酌の詩題に倣ったのであろう。柘植清修―不詳。露濯清輝―杜審言・康五庭芝月を

望んで懐う有り「露は濯ぐ清輝の苦きを」。清輝は月の清らかな光を指す。杜甫・月夜「清輝玉臂寒からん」。敲詩―賈島の推敲の故事より、詩を推敲すること。呂本中・長嘯夜泊「敲詩吟人の甕」。独坐―王維・竹里館「独り坐す幽篁の裏」を意識するであろう。養幽情―幽情は、深遠で高雅な感情。王羲之・蘭亭集序「一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る」。白居易・晚秋閑居「衣を披り閑坐して幽情を養う」。

老雨云。影有レ声奇語。○勉齋云。好詩好想。使三人有塵外之思。

【訓読】老雨云う。影に声有りは奇語。○勉齋云う。好詩好想。人をして塵外の（之）思い有ら使む。

【大意】雨森精翁評。「影に声有り」は、奇抜。山村勉齋評。よい詩だ。素晴らしい着想だ。俗世を超脱した気持ちを読者に持たせる詩だ。

【注釈】塵外―世塵を離れた清らかな気持。孟浩然・武陵泛舟「弥いよ塵外の心を清くす」。

29 舟遊 しゅうゆう 梧軒 こけん 山本氏 やまもとし 仝所人 どうしよのひと

彩船葉々棹^ニ西東^一。絲肉声飛籬箔^中。従^レ是一層添^ニ興味^一。水魚上^レ罝夕陽風。

【訓読】彩船葉々西東に棹さし。絲肉声は飛ぶ籬箔の中。是れ従り一層興味を添え。水魚罝に上る夕陽の風。

【大意】（舟遊び）鮮やかな色をした舟が一艘一艘、西へ東へさおさして動いていく。管弦の音色や妓女の美声が船のまの囲いの中に飛び込んでくる。さあこれから一層興味がますますことだ（お楽しみはこれからだ）。白魚が網にかかる、夕日が照り、風が吹いてくる中で。

【注釈】舟遊―和語「ふなあそび」の漢語化か。中国では用いない熟語。山本梧軒―不詳。彩船―色どり鮮やかな舟。娯楽遊覧に使う。葉々―葉は小舟の量詞。絲肉―琴と人間（の出す音）。籬箔―垣根のことであるが、船のともに見立てた。従は一層添興味―おそろくわざと和臭を出した句。口語的表現を狙った。水魚―安道湖七珍のシラウオとみてよいであろう。既出。

老雨云。孰謂夕陽水魚。不^レ若^ニ秋風蓴鱸^一乎。

【訓読】 老雨らうう云いう。孰たれか謂いう夕陽せきやう氷魚ひよぎよ。秋風しゅうふう蓴鱸じゆんろに若しかずと（平）。

【大意】 雨森精翁評。夕陽の中でとれる白魚が、秋風の中でとれるジュンサイやスズキに及ばないなんて誰が言うものか。

【注釈】 秋風蓴鱸―蓴鱸は、蓴羹（じゆんさいの吸い物）、鱸膾（すずきのなます、ただし日本のすずきと別種）の略で、晋の張翰が、秋風が吹きはじめると、故郷のこの料理が食べたくて退官して郷里に帰った故事（『世説新語』識鑿）。宍道湖の白魚だつて負けず劣らずうまくて興趣があるぞという気持ち。なお、シラウオの旬は春である。

30 春日偶成

愛山樵夫 高橋氏 同所人 住東京

出城皆是訪梅人。墨水蒲田争領春。竹外一枝掛寒月。吾園雖小却精神。

【訓読】 城を出づるは皆是れ梅を訪ぬる人。墨水蒲田争いて春を領す。竹外一枝寒月を掛け。吾が園は小なりと雖も却つて精神あり。

【大意】（春の日にたまたま作った詩）町から郊外に出て行くのは、みんな梅見をする人達だ。隅田川、蒲田と、競い合つて春の季節を独占して、他を圧倒している。（ごった返したのはいやだなあ。それに対して我が家は）竹の向こうの梅の一枝に寒々とした月が掛かっているだけだ。確かに私の庭は狭いが、だからこそ逆に春の生命力が満ち満ちているともいえよう。

【注釈】 高橋愛山―高橋基一。松江藩士の家に生まれ、藩主・松平定安の侍臣となり、版籍奉還後は定安と藩政改革に着手。東京へ移転後は「朝野新聞」の記者となり、民権家、自由党员として活動。『松江市史』通史編5、第一節、三松江出身の民権家・高橋基一の生涯とその立憲主義論（竹永三男島根大学名誉教授執筆）によれば、この時期、東京麹町に居を構えていたらしい。出城皆是訪梅人―城は、まち。中国では、町は城壁に囲まれている。楊巨源・城東早春「門を出づるは俱に是れ花を見る人」。楊巨源の詩は、春たけなわになつて、花見で人がごった返す時よりも、早春の静かな景色がよいと言っている。愛山も人ごみを嫌つたのであろう。墨水―隅田川（墨田川の表記もあった）の雅名。

蒲田―かまた。現東京都大田区の町名。梅の名所として、江戸時代より有名。争領春―王建・綺岫宮を過ぐ「野花黄蝶春風を領す」。隅田川、蒲田だけが、梅の名所として有名という意味にとった。人々がそこに殺到しているという意味かもしれない。竹外一枝―蘇軾・秦太虚の梅花に和す「竹外一枝斜めにして更に好し」。林逋・山園小梅「疎影横斜し水は清浅」を意識した句として名高い。寒月―清らかで冷たい印象を与える月。李白・月を望んで懐う有り「寒月清波に揺る」。吾園雖小―林希逸・陳橋山挽詩其二「数畝園は小なりと雖も」。愛山の家は先述のごとく町中にあつた。精神―人や物に生気があふれた状態。范成大・再び瓶中の梅花に題す「月窓の横影已に精神あり」。

编者云。眞個梅花知己。【己はもと己に作る。今改む】

【訓読】编者云う。眞個に梅花の知己なり。

【大意】编者君平賀静遠評。高橋君は本当に梅の知己だなあ。

【注釈】梅花知己―彭玉麟・詠梅「一生知己是梅花」を逆用したか。彭玉麟（一八一七―一八九〇）は曾国藩のもとで活躍した軍人。詩文と絵画をたしなんだ。彼の詠梅の詩は、（直接ではないが）鲁迅の印章「只有梅花是知己」のもとにもなった。

*この詩は、ジャーナリストとしての抱負をこめているのかも知れない。

〔付記〕本稿は、

科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号22K00340

近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二―二〇二四年度 研究代表者 要木純一）及び、

島根大学文学部山陰研究センター 山陰研究共同プロジェクト 近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩

人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 要木純一）
及び

島根大学法学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト 山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト（課題番号 2205 期間：二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 田中則雄）
による成果の一部である。